



TITLE:

大衆による風景破壊--オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆

AUTHOR(S):

小松, 佳弘; 羽鳥, 剛史; 藤井, 聡

CITATION:

小松, 佳弘 ...[et al]. 大衆による風景破壊--オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆. 景観・デザイン研究論文集 2009, 6: 23-30

ISSUE DATE:

2009

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/152296>

RIGHT:

土木学会

大衆による風景破壊： オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆

小松 佳弘¹・羽鳥 剛史²・藤井 聡³

¹学生会員 東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻（〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1）

E-mail: ykomatsu@plan.cv.titech.ac.jp

²正会員 東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻・助教（〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1）

E-mail: hatori@plan.cv.titech.ac.jp

³正会員 東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻・教授（〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1）

E-mail: fujii@plan.cv.titech.ac.jp

近年、我が国の風景や景観の破壊が深刻化していることが指摘されている。本研究では、このような景観問題を考える上で、個人の心理傾向性として「大衆性」に着目した。そして、オルテガの政治哲学理論を踏まえ、大衆性が高い個人が景観を軽視し、破壊すると言う仮説を理論的に措定した。そして、アンケート調査を通じてその仮説を実証的に検証した。その際、大衆社会論の代表的古典であるオルテガ「大衆の反逆」を基にして構成された個人の大衆性尺度を用い、それら大衆性が景観・風土に対する態度・意識に及ぼす影響を分析した。その結果、本研究の仮説が支持され、個人の大衆性が景観問題に及ぼす否定的影響が確認された。

Key Words : *the vulgarities of masses, landscape, Ortega's "The revolt of the masses"*

1. はじめに

多くの論者が指摘している様に、我が国の伝統的な良質な風景が破壊されているとの認識が共有されつつある¹⁾²⁾³⁾。——、日本全国の至る所で、ゴミのポイ捨てや放置駐輪・路上駐車が後を絶たず、街路は、派手派手しい看板やのぼりで埋め尽くされている、そして、画一化した、雑然とした景観や風景が次々と創出されており、それと同時に、地域の古い町並みや田園はその姿を消しつつある——。

こうした「惨状」を目の当たりにすれば、我が国において、景観問題が深刻の度を増していることは、大方議論の余地のない基本的な事実とすら言えるのではないだろうかと思えるところである。実際、我が国の行政においても、こうした認識の社会的共有を契機として、良質な景観形成に向けて様々な取り組みが検討されており、その中で、平成 16 年には我が国で初めて景観法が施行され、景観を保全あるいは育成するための法制度が整いつつある。また、地方自治体においても、景観条例や景観ガイドラインが策定され、地域において良質な景観作りを推進するための様々な方策が検討されているところ

である⁴⁾。

しかしながら、そうした取り組みや法制度の制定が進められつつある一方で、依然として、ゴミ投棄や路上駐車など、景観への配慮を欠いた行為が後を絶たないことがしばしば指摘されている⁵⁾。さらに、よりよい景観や風景を創出することを意図してデザインされた建築物や土木構造物が、地域との適切な調和を欠いた景観や風景を創出してしまう危険性も危惧されているところである¹⁾⁶⁾。

それでは、良質な風景の保全と育成のための様々な対策が実施されているにもかかわらず、「伝統的な良質な風景の破壊」に至るという事態が生じているとするならば、それは一体いかなる問題を暗示しているのであろうか。この問いに答える上では、そもそも「良質な風景」とは何か、という問題を避けて通るわけには行かないものと思われる。言うまでもなく、良質な風景なるものを一概に言い表すことは容易ではないところではあるが、もし、良質な風景なるものが存在するのなら、その風景は、時代と地域を越えた普遍的、絶対的な価値——すなわち、プラトンの言うところの「真・善・美」なるもの⁷⁾、と無縁ではないということは、伝統的哲学の根幹的

議論から演繹される基本的前提といて差し支えない¹¹⁾。なぜなら、もしもそうでないとするならば、究極的には、どのような風景であったとしても、誰か一人でもその風景を良質であると認識する限り、そのような風景を良質な風景でないと否定することが出来ない、という過度に価値相対主義的でニヒリスティックな議論¹²⁾に墮落せざるを得ないからである。こうした過度に価値相対主義的な議論から生み出されるものは、価値の相対化のみであり、それ以外の如何なる観点からみても価値あるものが生み出されることはないと言い得るであろう。そうであるならば、このような価値の相対化に支えられた風景が良質な風景たり得るものと期待することは甚だ困難であろう。そればかりか、価値の相対化は伝統的で良質な風景の破壊という帰結をもたらすであろうことも十分に想像されるところとなる。なぜなら、価値相対主義が蔓延するような状況にあつては、伝統的な良質な風景を破壊する、という行為そのものが何ら反駁に晒されることなく甘受されるという事態が生じる可能性も十分に予想が付くところだからである。この点を踏まえれば、「良質な風景の破壊」という昨今の事態が意味するところは、本質的に、人々の絶対的価値への志向性が低下していることの一つの徴候である可能性が浮かび上がることとなる¹³⁾。

こうした人々における絶対的価値への志向性の喪失については、古くから哲学的論考の中心課題であり続けてきたが、特に 19 世紀後半に端を発する「生の哲学」において、ニーチェ⁹⁾、シュペングラー¹⁰⁾、キルケゴール¹¹⁾、オルテガ¹²⁾らによって批判的に論じられてきた。彼らは、近代大衆社会にみられる価値喪失の中に、人間的生の否定や非道徳が胚胎していることを鋭く指摘したのであった。その中でも、オルテガ (1883-1955) は、その著書「大衆の反逆 (*La Rebelion de las Masas*)」 (1930)¹²⁾において、痛烈な大衆批判を展開しており、大衆人における絶対的価値への志向性の喪失——すなわち、

「大衆には、生まれながらにして、それが事象であろうと人間であろうと、とにかく彼らの彼方にあるものに注目するという機能が欠けている (p.93, 傍点は筆者による)¹²⁾

ことを憂いている。そして、彼は、自由主義的デモクラシーと技術主義を標榜する近代社会において、圧倒的に増大した人間的生の可能性を前にしながら、一切の価値を喪失した大衆人が自らの生の決断をなすことができないことを鋭い洞察を持って看破し、そこに、人間的生の危機として、大衆人の自己の生に対する否定的な屈折した態度を描写するのである。

オルテガの「大衆の反逆」は、1920 年代のヨーロッパを対象としたものであり、また、とりたてて景観論を

展開したものではない。ただし、今日の景観破壊の淵源に、人々の絶対的価値への志向性の低下が存在するとするならば、それは大衆人に顕著に見られる特徴であることはまさにオルテガが暗示するところのものである。それ故、オルテガの「大衆の反逆」は、現在の景観問題を考える上でも、示唆するところが少なくないであろうことが予期されるところとなる。

しかしながら、これまでのところ、景観破壊と人々の大衆化との関連性については、理論的にも実証的にも十分に検証されてきたとは言い難いように思われる¹⁴⁾。そこで、本研究では、以上の認識の下、オルテガの大衆論を踏まえて、個人の大衆性が景観問題に及ぼす否定的影響について実証的に検討することを目的とした実証的な検討を行うこととした。この目的の下、オルテガ「大衆の反逆」を基にして、人々が大衆化することで景観が破壊され得るという仮説を理論的に措定する。そして、アンケート調査を通じてその仮説を実証的に検証することとする。

2. 理論仮説

(1) オルテガの大衆論

本研究の仮説を措定する前に、オルテガの大衆論¹²⁾について説明することとしよう。オルテガの大衆論の特徴は、大衆を数量的な概念あるいは政治的・社会的階級として捉えるのではなく、万人に共通する「心理的事実」として捉えようとしたところにある。オルテガの言葉を借りるなら、この点は次のように説明される。

「大衆とは、善い意味でも悪い意味でも、自分自身に特殊な価値を認めようとはせず、自分は『すべての人』と同じであると感じ、そのことに苦痛を覚えるどころか、他の人々と同一であると感じることに喜びを見出しているすべての人のことである。(p.17)¹²⁾

さらに、このような大衆に対置するものと論じられている「選ばれた人間」とは、

「われこそは他に優る者なりと信じ込んでいる僭越な人間ではなく、たとえ自力で達成しえなくても、他の人々以上に自分自身に対して、多くしかも高度な要求を課す人のこと (p.17)¹²⁾

を意味するものであった。すなわち、オルテガにとっての大衆は現状に満足しきった「平均人 (p.15) (*average man*)」, 「凡俗な人間 (p.25) (*vulgar*)」であり、この意味において「選ばれた人間 (p.17)」あるいは「高貴な人つまり努力の人 (p.92)」とは区別される。このように「大衆」と「選ばれた人間」との区別を人間の心理的類型による区分とする点で、オルテガの大衆観は、貴族主

義的な見方とは異なるものと言える。むしろ、オルテガは、知識人やエリートの中に精神の凡俗化する傾向を見出し、このような大衆人によって支配される時代を「慢心しきったお坊ちゃんの時代 (p.143)」と呼んだのである。

このように、オルテガの大衆批判はあくまでも人間に存する心理的類型を問題提起したものである。この点において、オルテガの主張する大衆像は時代を超えた1つの普遍的な精神の構造を提示したものであり、現代社会においても含意するところが少なくないものと思われる。この認識の下、筆者らは先行研究¹³⁾において、以上のオルテガの定義する心理的事実としての大衆概念に着目し、オルテガの「大衆の反逆」における大衆の心理的描写に基づいて、個人の大衆性を表す質問項目を作成し、大衆性についての心理尺度を構成している。その尺度構成の詳細については、引用論文¹³⁾を参照されたいが、この先行研究によって、大衆性が、「傲慢性」と「自己閉塞性」という2つの因子から構成されることが示されている。ここに、傲慢性とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」を表している。一方、自己閉塞性とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表している。本研究においても、人々の大衆性指標を測る上で、筆者らの先行研究に基づいて、これら2つの心理尺度を用いることとする。なお、その具体的な質問項目については、以下、3.において改めて説明することとする。

(2) 本研究の理論仮説

それでは、人々の大衆化は、景観問題に対して如何なる帰結を導くのであろうか。本研究ではこの問題を検討する上で、以上で述べたようなオルテガの論ずる大衆性と景観に対する態度・意識との間の因果関係についての仮説を措定する。以下では、オルテガの「大衆の反逆」における記述を引用しつつ、それを本研究の文脈に照らして解釈することによって、本研究の仮説を導くこととしよう。

オルテガの「大衆の反逆」¹²⁾において、大衆が景観や風景そのものに対して如何なる態度を示すかについては、直接的に記述されていないものの、そうした態度のあり方の一つの可能性は、オルテガが痛烈に批判する大衆における甘やかされた子供の心理——「慢心しきったお坊ちゃん (p.143) ¹²⁾」と呼ばれるところのもの——から暗示されるように思われる。すなわち、オルテガ曰く、

「(大衆の心理的特徴は) 自分の生の欲望の、すなわち、自分自身の無制限な膨張と、自分の安楽な生存を可能にしてくれたすべてのものに対する徹底的な忘恩

である。この二つの傾向はあの甘やかされた子供の心理に特徴的なものである。(p.80) ¹²⁾

このように、大衆人は自分の欲望に何ら制限を課すことなく、その欲望の赴くままであり、「自分の好き勝手に振る舞えると信じている (p.144) ¹²⁾」ことから、大衆人が自分の私利私欲を迫及し、そのために景観や風景を汚すこと——例えば、街路にゴミを投棄することや路上駐車すること、看板やのぼりを掲げること——に、何の躊躇いも感じないことが、オルテガの議論から推察されるところである。しかも、傲慢なる大衆人はものごとの道理や背後関係には無関心であり、それ故、現在の「安楽な生存」を可能にした先人の営為に対する恩恵の念を持つこともないことを、オルテガは指摘しているのである。これこそまさに「甘やかされた子供」、「慢心しきったお坊ちゃん」に見られる心理状態に他ならない。そして、オルテガによれば、このような大衆人は「過去に対するいっさいの敬意と配慮を失ってしまった (p.47) ¹²⁾」であり、それ故、自分たちの社会を培ってきた歴史や伝統を否定する、ということとなろう。

さらに、オルテガによれば、大衆人は「自己の希望と好みを社会に強制している (p.20) ¹²⁾」のであり、これを本稿の文脈に即して解釈すれば、大衆が自分の個人的な「希望や好み」を景観や風景に求め、景観や風景を自分の思うがままに「デザイン」できると信じ込んでいると解釈することが出来よう。しかし、大衆にとって

「客観的な規範を尊敬するということを前提としているいっさいの共存形式が嫌悪される (p.104) ¹²⁾

と、オルテガが指摘しているように、そうした大衆の風景や景観に対する「希望や好み」は、個性なる価値のものと、「客観的な規範」を前提とする他者との一切の共感も周囲との一切の調和も欠いたものであることが少なからず予想されるところである。

以上のオルテガの議論に一定の妥当性があるとするなら、大衆が景観に対して示す態度について、以下のような仮説を措定することが出来ることとなる。

仮説

大衆性の高い個人は、良質な風景を軽視し、破壊する。

3. 調査の概要

(1) 調査対象

本研究では、以上の仮説を検証するための実証研究の第一歩として、大学生を対象とした調査データを用いた実証分析を行うこととした¹⁾。この調査では、まず、東京工業大学の構内にて調査協力者を募集するチラシを配

表-1 大衆性尺度の質問項目

質問項目
「傲慢性」尺度 ($\alpha=.679$)
自分を拘束するのは自分だけだと思う
自分の意見が誤っている事などない、と思う
私は、どんな時でも勝ち続けるのではないか、と何となく思う
自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う
どんなときも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
「ものの道理」には、あまり興味がない
物事の背景にあることには、あまり興味がない
日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う*
世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
人は人、自分は自分、だと思ふ
自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないことだと思う
道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思う
「自己閉塞性」尺度 ($\alpha=.674$)
伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている*
日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている*
世の中は驚きに満ちていると感じる*
我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思う*
自分自身への要求が多いほうだ*
もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思う*
自分は進んで義務や困難を負う方だ*

α : クロンバックの信頼性係数, *逆転項目

布し、合計で 200 名の協力者を得た。そのうち、182 人が男性 (91%) , 18 人が女性 (9%) であり、その平均年齢は 20.03 歳、年齢標準偏差 1.87 歳であった。

(2) 調査方法

本調査は、2006年10月18日、19日の2日間に分けて実施し、東京工業大学の構内の一つの教室に被調査者を集めて行った。教室にて被調査者に調査票を配布して、そ

の場での回答を依頼した。

(3) 調査項目

本調査では 2. で措定した仮説を検証するべく、以下、**a)**に示すような個人の公衆性指標を測るための質問項目を設定するとともに、**b)**に示すような景観に対する態度・意識の指標を測るための質問項目を作成した。

a) 公衆性

公衆性指標を測るための質問項目として、先述の筆者らの先行研究¹³⁾で提案された公衆性尺度を用いる。表-1に示すような 2 因子 19 項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「まったく思わない」の 7 件法で回答を要請した。ここで、傲慢性は、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に関する過大な評価に関わる質問項目から構成される。一方、自己閉塞性は、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中での責務に関わる質問項目から構成される。そして、「傲慢性」尺度については対応する 12 項目の加算平均から、「自己閉塞性」尺度については対応する 7 項目のそれぞれを反転した上で求められる加算平均から、それぞれの尺度を構成した。なお、それぞれの尺度の α 係数を算出したところ、「傲慢性」については.679、「自己閉塞性」については.674 となり、一定程度の信頼性が認められた。

b) 景観に対する態度・意識

国土交通省が平成 15 年に発表した「美しい国づくり政策大綱」¹⁴⁾では、わが国の風景・景観の現状として、以下のような肯定的側面と否定的側面を示している。まず、肯定的側面として、地域による気候・風土の多様性と地域の歴史と文化に根ざした町なみの 2 点を挙げている。一方、否定的側面として、経済性や効率性、機能性ばかりを重視した美しさへの配慮を欠いた景観の創出と公共的空間でのゴミ投棄など、モラルを欠いた人々の諸行為の 2 点を挙げている。このことを踏まえて、本研究

表-2 景観に対する態度・意識の記述統計と、公衆性と景観に対する態度・意識間の相関分析結果

	平均	標準偏差	傲慢性		自己閉塞性	
			r	p	r	p
ゴミのポイ捨てをすることがありますか	1.990	1.480	.251	<.001	.083	.120
生活の利便性のためには景観を犠牲にしても、仕方がないと思いますか	3.495	1.641	.202	.002	.331	<.001
古い美しい町並みを維持していくことはとても大切なことだと思いますか	5.490	1.556	-.110	.060	-.428	<.001
あなたが、「古い美しい街並み」に住んでいる場合を想像してください。その時、あなたは、その街並みを維持するため、どれくらいのコスト（時間とお金）を負担すると思いますか	4.575	1.423	-.248	<.001	-.431	<.001
それぞれの地域の風土を大切にしていかなければならないと思いますか	5.575	1.339	-.171	.008	-.477	<.001

r: 相関係数, p: 有意確率, **bold**: 1%有意

では、景観問題として「公共空間の景観破壊」，「景観に対する私的利益の優先」，「歴史ある町並みの景観」，「地域の風土保全」の4つの論点に着目し，人々の景観に対する態度や意識の指標を測るために，以下のような5つの質問項目を作成した。

「公共空間の景観破壊」

- ・ ゴミのポイ捨てをすることがありますか
－「全くない」から「よくある」までの7件法で回答

「景観に対する私的利益の優先」

- ・ 生活の利便性のためには景観を犠牲にしても、仕方がないと思いますか
－「全く思わない」から「とてもそう思う」までの7件法で回答

「歴史ある町並みの景観」

- ・ 古い美しい町並みを維持していくことはとても大切なことだと思いますか
－「全く思わない」から「とてもそう思う」までの7件法で回答
- ・ あなたが、「古い美しい街並み」に住んでいる場合を想像してください。その時、あなたは、その街並みを維持するため、どれくらいのコスト（時間とお金）を負担すると思いますか
－「全く負担しない」から「とてもたくさん負担する」までの7件法で回答

「地域の風土保全」

- ・ それぞれの地域の風土を大切にしていかなければならないと思いますか
－「全く思わない」から「とてもそう思う」までの7件法で回答

4. 結果

まず、大衆性を構成する2尺度と、景観への態度・意識に関わる質問項目間の相関分析を行った。その結果を表-2に示す。まず、傲慢性尺度に着目すると、「古い美しい町並みの維持」を除く、その他の4項目と有意な相関を示した。この結果は、傲慢性が高い個人は、自己利益の確保のためには、景観を犠牲にすること厭わず、また、伝統ある景観や地域の風土を軽視する傾向にあることを示唆している。一方、自己閉塞性尺度に着目すると「ゴミのポイ捨て」とは有意な相関が見られなかったものの、その他の4項目に対して有意な相関を示した。この結果は、自己閉塞性の高い個人は、景観や風景に興味を置かないことを示唆している。なお、相関係数の符

号に着目すると、有意にならなかった項目も含めすべての項目について、傲慢性と自己閉塞性ともに、景観に対する肯定的態度・意識については負の相関が、否定的態度・意識に対しては正の相関が示された。

ここで、有意な相関が示されたものに着目すると、傲慢性との相関係数よりも、自己閉塞性との間の相関係数が高い水準となっていることがわかる。特に「古い美しい町並みの維持」「街並みを維持するためのコスト負担」「地域の風土」の3項目に対して、自己閉塞性は0.4から0.5程度の高い相関係数となっていることが分かる。

以上より、大衆性を構成する傲慢性と自己閉塞性のいずれかが景観に対する態度・意識に関する5つの質問項目のすべてと有意な相関を持ち、そのうち3つの項目に関しては、両尺度とも有意な相関を持つことが分かった。そして、傲慢性よりもむしろ、自己閉塞性の方が、景観破壊を促進する行動と強く関連している傾向が示された。

ここで、大衆性の高い大衆人と、大衆性の低い非大衆

表-3 傲慢性、自己閉塞性、大衆性による景観に対する態度・意識の記述統計と、平均の差のt検定結果

	高傲優群 (n=68)		低傲慢群 (n=68)		平均の差	t	p
	M	[SD]	M	[SD]			
ゴミのポイ捨て	2.500	[1.697]	1.676	[1.275]	0.824	3.199	.002
生活の利便性	3.838	[1.636]	3.029	[1.476]	0.809	3.028	.003
古い美しい町並みの維持	5.235	[1.694]	5.632	[1.434]	-0.397	-1.475	.142
コスト負担	4.074	[1.548]	4.971	[1.269]	-0.897	-3.695	<.001
地域の風土	5.294	[1.372]	5.985	[1.072]	-0.691	-3.274	.001
自由度:							134

	高自己閉塞群 (n=64)		低自己閉塞群 (n=74)		平均の差	t	p
	M	[SD]	M	[SD]			
ゴミのポイ捨て	2.063	[1.489]	1.797	[1.375]	0.265	1.087	.279
生活の利便性	4.063	[1.592]	2.919	[1.506]	1.144	4.332	<.001
古い美しい町並みの維持	4.781	[1.759]	5.986	[1.319]	-1.205	-4.589	<.001
コスト負担	3.922	[1.515]	5.135	[1.114]	-1.213	-5.404	<.001
地域の風土	4.875	[1.485]	6.149	[1.081]	-1.274	-5.809	<.001
自由度:							136

	高大衆者 (n=28)		低大衆者 (n=35)		平均の差	t	p
	M	[SD]	M	[SD]			
ゴミのポイ捨て	2.679	[1.786]	1.229	[0.490]	1.450	4.600	<.001
生活の利便性	4.357	[1.569]	2.743	[1.421]	1.614	4.278	<.001
古い美しい町並みの維持	4.643	[1.768]	6.057	[1.187]	-1.414	-3.787	<.001
コスト負担	3.750	[1.602]	5.200	[1.023]	-1.450	-4.362	<.001
地域の風土	4.893	[1.474]	6.343	[0.873]	-1.450	-4.857	<.001
自由度:							61

M: 平均, SD: 標準偏差, p: 有意確率, **bold**: 1%有意(両側)

注) 高傲優者と低傲慢者: 傲慢性尺度得点上位 1/3 と下位 1/3

高自己閉塞者と低自己閉塞者: 自己閉塞性尺度得点上位 1/3 と下位 1/3

高大衆者と低大衆者: 両尺度とも得点上位 1/3 と得点下位 1/3

「ゴミのポイ捨て」: ごみのポイ捨てをすることがありますか

「生活の利便性」: 生活の利便性のためには景観を犠牲にしても、仕方がないと思いますか

「古い美しい町並みの維持」: 古い美しい町並みを維持していくことはとても大切なことだと思いますか

「コスト負担」: あなたが、「古い美しい街並み」に住んでいる場合を想像してください。その時、あなたは、その街並みを維持するため、どれくらいのコスト（時間とお金）を負担すると思いますか

「地域の風土」: それぞれの地域の風土を大切にしていかなければならないと思いますか

人との間で、景観についての破壊的行動や保守的行動の水準がどの程度異なるかを把握することを目的として、傲慢性と自己閉塞性のそれぞれの指標を用いて被験者を分類した上で、各種の従属変数を比較するという分析を行った。

まず、被験者をそれぞれ傲慢性の高さと自己閉塞性の高さによって高傲慢者と低傲慢者、高自己閉塞者と低自己閉塞者に分類した。さらに傲慢性が高くかつ自己閉塞性が高い被験者を高大衆者、傲慢性が低くかつ自己閉塞性が低い被験者を低大衆者として「高大衆者」と「低大衆者」の2群に分類した。そしてそれぞれについて、各従属変数の平均と標準偏差を求めると共に、その両者間の差についてt検定を行った。その結果を表-3に示す。

表-3より、高傲慢者、高自己閉塞者、高大衆者はそれぞれ低傲慢者、低自己閉塞者、低大衆者に対して、景観に対する肯定的態度・意識については低い値を、否定的態度・意識に対しては高い値が示された。ここで、高傲慢者と低傲慢者間では「古い美しい町並みの維持」を除く、すべての項目に対して有意な差を示し、高自己閉塞者と低自己閉塞者間では「ゴミのポイ捨て」を除くすべての項目間に有意な差が示された。

傲慢性と自己閉塞性の双方の尺度を用いて分類した高大衆者と低大衆者との間については、すべての項目において0.1%水準で有意な結果となった。また、両者の間の差の大きさに着目しても、傲慢性や自己閉塞性のみで分類した場合の差よりも大きな水準となっていることが示された。例えば、良質な景観保全のコスト負担については、高大衆者は「どちらとも言えない」の4を下回る否定的な水準を示していた一方で、低大衆者は、4を大きく上回る52という非常に肯定的な水準となるという結果となっており、大衆性に支配された精神の持ち主と、そうでない持ち主との間で、景観保全に対する態度が大きく異なっている様子が浮き彫りとなった。

以上の結果は、本研究の仮説を支持する統計的結果である。

5. 考察

(1) 仮説の検定結果

本研究では、現代大衆社会において、伝統的な良質な景観が破壊されている、という問題意識のもと、オルテガの「大衆の反逆」¹²⁾での論考を踏まえつつ、「大衆性の高い個人は、良質な風景を破壊、軽視する」という仮説を掲げた。そして、アンケート調査を実施し、仮説検定を行ったところ、仮説を支持する結果が得られた。

さて、本研究の仮説は、オルテガの哲学的思想上の論

考から演繹したものである。冒頭で述べたように、オルテガの思想が人間的生の哲学である以上、景観や風土と密接に関わることは理論的に十分に想定されると言い得るものの、彼はとりたてて景観論を展開しているわけではない。また、オルテガは、近代的な実証心理学的手法を用いて彼の論考の妥当性を吟味しているわけでもなく、彼以後の心理学研究の中でもそうした吟味はなされてこなかった。そうした中で、本研究は景観問題を対象として、大衆の有する負の可能性について実証的検討を行い、そして、それを通じてオルテガの論考に一定の妥当性が存在しうる可能性を改めて示したものである。

ここでさらに、本研究で行った調査が現代日本の学生を対象にしたものであることを踏まえるのであれば、20世紀前半の欧州社会の中でオルテガが見出した大衆の心理描写が、現代の日本人においても妥当すると言う可能性を示唆するものであると解釈することができよう。無論、本研究のデータは大学生を対象として得られたものであり、オルテガの論考の経験的妥当性を実証するためには、より幅広い年齢と職種を対象とした豊かなサンプルを用い、追試を行う必要があることは自明である。しかし、逆に言えばオルテガの心理描写が現代日本の学生において「のみ」妥当すると信ずる根拠は、少なくとも筆者等にはとりたてて見当たらないことを考えると、本研究の限られたサンプルでの分析結果が、オルテガによる大衆の心理描写に一定の普遍性が存在している可能性を暗示している可能性は十分に考えられるものと言えよう。

(2) 傲慢性と自己閉塞性の相違

本研究では、傲慢性と自己閉塞性の効果の相違については理論的な仮説を掲定していなかったものの、データ分析の結果から、両者が景観への態度・意識に及ぼす影響について、相違点が見いだされた。ここでは、その理由とその含意について、考察を加えることとしたい。

まず、傲慢性については、「古い美しい町並みの維持」や「地域の風土」に関わる質問項目とそれほど高い相関が示されなかった。その理由について、傲慢性の高い個人は、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信するが故に、自己利益を損ねるような事柄に対しては、過剰に拒否反応を示すものの、上記のような自己利益の阻害感を直接的に喚起しないような事柄に対しては、それほど大きな否定的反応を示さなかった可能性が考えられる。ただし、傲慢性の高い個人は、すべての質問項目において、景観に対して否定的な態度・意識を示しており、このことより、傲慢性は景観を軽視し、破壊する方向にあるものと考えられる。

一方で、自己閉塞性については、「ゴミのポイ捨て」

に対して有意な相関を示さなかったが、これについては、自己閉塞性の高い個人は、その自己閉塞性故、外部に対して自発的に働きかけることを忌避するためである可能性が考えられる。ただし、特に、自己閉塞性と各項目間の相関係数の大きさに着目すると、絶対値が 0.4 以上と高い相関係数を示す項目が 3 つ見られることから、大衆性の 2 要素のうち、より自己閉塞性が景観に対して強く否定的な影響を及ぼす可能性が考えられる。ここで、相関係数の絶対値が 0.4 以上となった項目は「古い美しい町並みの維持していくこと」や「地域の風土を大切にしていかなければならない」、「街並みを維持するためのコスト負担」である。これらの項目はいずれも自分が景観や風土を保持するために何らかの働きかけを行うことについての尺度である。ここで、このような外部への働きかけを駆動するのは、個人の責任意識、義務意識であると考えられる点を踏まえると、これらの項目に高い負の相関が見られたという結果は、自己閉塞性の高い個人は何らかの責任を負わされることを極端に回避しているという傾向を示唆しているものと考えられる。このように、自己閉塞性の高い個人は「ゴミのポイ捨て」のような形で直接的に景観を破壊することは無くとも、景観維持の責務から逃れることで、間接的に景観を破壊する可能性が考えられる。

以上の考察より、大衆性の一つの側面である傲慢性は、景観の保全行動に負の影響を及ぼしていると共にゴミのポイ捨てに象徴される景観破壊行動に正の影響を及ぼしているという様子が、ならびに、大衆性のもう一つの側面である自己閉塞性は、とりわけ景観の保全行動に重大な否定的影響を及ぼしているという様子が、それぞれ浮き彫りとなった。

(3) 大衆化の景観問題への破壊的帰結

本研究で措定した仮説——すなわち、「大衆性の高い個人は、良質な風景を破壊、軽視する」は、一見したところ、単純な仮説ではあるが、もし、この仮説が「真」であるとするなら、それは、我が国の景観や風景を考える上で、極めて深刻な問題を暗示するものと言え得るものと考えられる。その理由は、本研究で論じた「大衆」が、「人間の種別」ではなく、人間に存する「心的傾向」を表すものであるためである。すなわち、本研究が描写したのは、我々の社会の中に大衆と呼ばれるような一群の集団における心的傾向なのではなく、万人が多かれ少なかれ持ちうる心的傾向なのである。それ故、本研究の仮説から、景観や風景に関わるすべての人々——、例えば、地域住民、商店主、デザイナー、行政——が、その地域における景観や風景を破壊する可能性を有していることが暗示されているものと考えられる。その意味

するところは、次の様に描写することが出来るであろう。

——地域住民が大衆化した場合、そこら中にゴミを撒き散らし、放置駐輪・路上駐車を繰り返す。商店主が大衆化した場合、出来る限り目立つように、派手派手しい看板やのぼりを掲げる。そして、景観のデザイナー達が大衆化した場合、自分の専門とする特定の領域に閉じこもり、自分の頭だけで完成を見た景観を地域に押し付け、満足感に浸ることとなる——。

無論、この描写は、一つの可能な描写であるに過ぎないが、それは筆者等の独断で描き出したものでは決して無い点に注意されたい。それは、80 年近く以前に記述され、そして、その時点から今日に至るまで、世界中で読み続けられてきた一哲学者オルテガの論述から演繹されたものであると共に、現代の日本において採取されたサンプル心理データによっても実証的に裏付けられている描写なのである。もしも、この描写が正鵠を射たものであるとするなら、こうした大衆の心理や態度こそが、昨今、様々な形で様々な地域で見られるようになっていく景観問題を深刻化させている本質的な原因の一つであるという可能性が示唆されていると言えよう。

(4) 良質な景観形成に向けて

以上述べたように、本研究は、今日の景観破壊の淵源に、個人の良質性という心理的傾向性が存在し得ることを示唆している。この点を踏まえるなら冒頭で述べたように、近年、景観や風土の保全のための様々な法や制度の整備が進展しつつあるものの、残念ながら、以上の結果を見る限り、景観問題という特定の対象を取り出して、景観の保全や育成のための法制度やガイドラインを定めたとしても、それだけでは良質な景観の形成など望むべくもないものと言わざるを得ないであろう。なぜなら、本研究が描写した傲慢かつ自己閉塞的な大衆に対して、手続きやルールに対する遵守を期待することは困難であると考えられるからである。個人の良質性が本質的な課題である以上、人々の大衆化を可能な限り抑制するための努力が必要であろう。そのような方途として、具体的にどの様に取り組むべきかについては、本研究のデータからだけでは明らかではないが、例えば、一人一人との絶えざるコミュニケーションを通じてもたらされる「態度変容」¹⁵⁾によって、景観への配慮を呼びかけることによって、傲慢性と自己閉塞性を少しずつ抑制する可能性が考えられる。また、先行研究¹⁶⁾において、家庭内でのしつけや地域との連帯等、幼少期の生活環境が大衆性の形成に少なからず影響を及ぼしていることから、家族や地域コミュニティの再生を図ることも有効な方途の一つと考えられよう。今後はこのような取り組みに関する実証的、実務的な検討を続けていくことが必要であろう。

脚注

- [1] この点は、藤井による先行研究¹⁾において、「良質な風景」を「現代人のみならず、過去の人々や未来の人々、あるいは、当該地域外の人々において共通して良質と認識される風景」と定義していることと整合的である。
- [2] 藤井による先行研究¹⁾において、客観的な価値の根拠の存在を信ずる精神性たる宗教性が不在であるのなら、良質な風景を創出していくことは著しく困難となるであろう、という仮説が論じられているが、その仮説の実証的な検証は行われていない。
- [3] いかなるサンプルを用いた場合においても、そのデータによって仮に仮説が支持されたとしても、その仮説が真であることが証明されるということとはあり得ない。したがって、言うまでもなく、本研究の分析もその例外ではなく、本研究の仮説の妥当性を“証明”するものではない。しかしながら、もしも、本研究の仮説に心理学的な妥当性が存在していないのなら、仮に大学生サンプルであっても、その仮説を支持しないデータが得られるであろうことが十分に予想される。それ故、本研究のデータを用いた仮説検証にも、一定の実証的価値が存在することとなる。なお、こうした仮説検証の考え方は、一般に反証主義に基づく科学的方法論として知られており、一般的な心理学研究で採用される考え方である。本研究も、そうした反証主義に基づく科学的研究に位置づけられるものである。ただし、言うまでもなく、本研究で提案する仮説の真偽を、より厳密に確認するためには、より広範なサンプルを用いた仮説検証が必要とされている。その意味において、本研究の検証は、そうした研究の第一歩と位置づけられる。

参考文献

- 1) 藤井聡：風景の近代化とニヒリズム—宗教性なきデザインの破壊的帰結について—, 景観・デザイン研究論文集, No. 1, pp. 67-78, 2006.
- 2) 篠原修:何が本質的問題なのか, In: 都市新基盤整備研究会

- 森地茂 篠原修編, 都市の未来—21世紀型都市の条件—, 日本経済新聞社, pp. 94-107, 2003.
- 3) 青山俊樹:美しい国づくり政策大綱と景観法を受けたさまざまな取り組み, 土木学会誌, vol. 90, No. 2, pp.12, 2005.
- 4) 加瀬靖子・横内憲久・岡田智秀, 景観法に基づく景観計画の策定プロセスに関する研究, 景観デザイン研究・講演集, Vol. 2, 2006.
- 5) 藤井聡 (共著) 風格ある風景と「行動変容」, In: 土木と景観—風景のためのデザインとマネジメント—, 学芸出版, pp. 9-54, 2007.
- 6) 桑子敏雄:風景の中の環境哲学, 東京大学出版会, 2005.
- 7) プラトン:国家 (藤沢令夫 訳) (上・下), 岩波文庫, 1971.
- 8) 藤井聡:風土に関する土木工学的考察—近代保守思想に基づく和辻「風土:人間学的考察」の実践的批評—, 土木学会論文集D, 62(3), pp.334-350, 2006.
- 9) ニーチェ:ツァラトゥストラはこう言った(氷上信廣 訳) (上・下), 岩波文庫, 1967.
- 10) オスヴァルト・シュペングラー:西洋の没落(村上正俊 訳), さつき書房, 1989.
- 11) セーレン・キルケゴール:現代の批評, キルケゴール 死に至る病・現代の批評 (枘田啓三郎 訳), 中央公論社, 2003.
- 12) ホセ・オルテガ・イ・ガセット:大衆の反逆 (神吉敬三 訳), ちくま学芸文庫, 1995.
- 13) 羽鳥剛史, 小松佳弘, 藤井聡:大衆性尺度の構成—“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析—, 心理学研究, 79(5), pp.423-431, 2008.
- 14) 国土交通省:美しい国づくり政策大綱, 2003.
- 15) 藤井聡:土木計画のための社会的行動理論—態度追従型計画から態度変容型計画へ—, 土木学会論文集, No. 688/IV-53, pp. 19-35, 2001.
- 16) 藤井聡・羽鳥剛史・小松佳弘:オルテガ「大衆の反逆」論についての実証的研究, 日本社会心理学会第48回発表論文集, pp. 120-121, 2007.

DESTRUCTION OF LANDSCAPE BY THE MASSES: IMPLICATION OF ORTEGA'S "THE REVOLT OF THE MASSES" FOR RICH LANDSCAPE

Yoshihiro KOMATSU, Tsuyoshi HATORI and Satoshi FUJII

Recently, it is indicated that destruction of landscape is becoming serious in Japan. In this study, we focused on “the vulgarity of the masses” that is regarded as a mental disposition of an individual, which might be of relevance to the issue of landscape. Based upon Ortega’s Political Philosophy, it was hypothesized that if people became vulgar, they would disregard and moreover damage beautiful landscape. In order to test this hypothesis, we implemented a questionnaire survey. In the questionnaire, we asked participants to respond to some measurements for the spiritual vulgarity which were developed based on Ortega’s “the revolt of the masses” (1930) and investigated the influences of these measurements upon participants’ attitudes towards landscape. The obtained data statistically supported the hypothesis, and it was indicated that the masses might have a negative influence on the landscape.